

韓国人上級日本語学習者のレポート産出過程の分析

副田 恵理子 平塚 真理

1. はじめに

学部留学生を指導していると、一般教養科目や学部の専門科目で課されたレポートの作成に難しさを感じているという学生は多い。そこで、学習者にとってレポート作成の際に何が問題となっているのか、どのような力が必要なかを明らかにするために、本研究では学習者が実際に学部授業で課されたレポート課題をどのように作成しているのか、その実態を調査した。

2. 先行研究

二通（2003）が指摘しているように、学部留学生のレポートの実情や留学生が抱えている問題を明らかにしている研究は少ない。二通（2003）はインタビューにより学部の専門科目で課されたレポートを作成する際に留学生が抱えている問題点を明らかにし、文献や資料を批判的・客観的に読む力と、読むことを書くことに結びつける力を養成することが重要であると述べている。舟橋・大本(2012)はアンケートにより、学習者がレポート作成の際に「正しい文法で書くこと」「資料の要約」「文章をまとめること」「自分の意見を表現すること」に難しさを感じていることを明らかにしている。しかし、留学生自身が認識していない問題点も明らかにするためには、学習者がレポートを作成する過程を観察することが必要であると思われる。

日本語学習者の文章産出過程を調査した研究は多く行われている（Uzawa and Cumming 1989, Pennington and So 1993, 衣川 1993, 副田 2000, 石橋2002, 宮崎2004, 吉田 2011, 石毛2012）。しかし、石毛（2015a）で明らかにされているように、手書きによる文章作成過程と

近年一般的となっているコンピュータによる作成過程には違いが見られるが、PC の文章作成過程を観察したものは少ない。また、宮崎（2004）で指摘されているように、文章産出過程における行動は「誰を読み手としてどのような目的で書かれているのか」によって大きく影響を受けられる。しかし、文章産出過程研究の多くはその作文テーマが調査者によって調査のために提示されたものであるため、読み手や作文の目的が明確でない場合が多く、留学生がアカデミックな実生活の場面で実際に文章を作成している過程を調査したものは少ない。そこで、本調査では学習者がコンピュータを使用して実際の授業で課されたレポートを作成している過程を観察したいと考えた。また、文章産出過程研究の多くがデータ収集に思考発話法^{注1}を用いているが、思考発話法は思考の過程を発話することで、その行動が文章作成活動の妨げになるとの指摘もある（Pennington and So 1993、宮崎2004）。そのため、今回は学習者のレポート作成過程をビデオ撮影することによりその実態を明らかにする。また、外からの観察では見えない部分についてはフォローアップインタビューにより明らかにしたい。

3. 調査方法

3-1 調査協力者

本学に交換留学生として4月～翌3月まで1年間在籍していた韓国人留学生2名から協力を得た。この2名は両名とも来日前に日本語能力試験のN1に合格している。

3-2 データ収集方法

後期の授業で課せられた学期末レポートを作成する過程の一部（約90

表1 レポート課題

調査協力者A	日本語学講義：テキスト中の課題（文章を読んで、人物描写にどのような表現の工夫がなされているか述べる。）
調査協力者B	日本文学講義：テキストから1編を取り上げ、講義内容をまとめ、自分なりの意見を述べる。

分) をビデオ録画し観察した。調査は2013年1月に行った。各調査協力者のレポートの課題は表1の通りである。

今回はパイロットスタディとしてレポート作成の書き始めの部分をビデオ録画した。録画時間を90分に限定したのは、これ以上の時間のビデオ録画は調査協力者の負担になると思われたためである。

データ収集は大学内の談話スペースを利用して行ったが、レポート作成には普段使用している機能がそのまま使えるように調査協力者自身のPCや電子辞書を使用してもらった。また、レポート作成のために必要な全ての資料や書籍も持参し使用してもらった。調査は2台のビデオカメラを用い、調査協力者のレポート作成の様子をPC画面が見えるアングルと調査協力者の視線や全体的な動きがわかるアングルで撮影した。レポート作成終了後には各行動の理由や目的などについてフォローアップインタビューを行い、これをICレコーダーで録音した。

3-3 データ分析方法

レポートを作成する過程のビデオ録画データを文字化し、ここで見られた行動を分類しコード化した。表2に行動の分類を示す。また、各行動にかけた時

表2 レポート産出過程に見られた行動の分類

書く	ワープロソフトで打つ
	フォントやレイアウトを設定する
	編集する
画面を見る	画面を見る
	カーソル・マウスポインタを動かしながら、画面を見る
	スクロールしながら、画面を見る
	文・文章をハイライト(選択)しながら、画面を見る 指で文をなぞりながら、画面を見る
PCソフト管理	PCのソフト立ち上げ、終了などを行う
リソース使用	インターネットを使う
	テキストを使う
	電子辞書を使う
	プリントを使う
	ノートを使う
	メモしたのを見る
	友達に聞く
	先生に聞く
メモ	テキストにメモする
	プリントにメモする
	PC画面上で(メモ機能を使って)メモする
リハーサル	これから書くことを声に出して言ってみる
無行動	何も行動をしない(考えている)
休憩	お菓子を食べるなどして休憩する
その他	その他

間を明らかにするため、コード化したデータを5秒単位でカウントし量的に分析した。さらに、ビデオ録画データをフォローアップインタビューの録音データと合わせて、各調査協力者の行動の内容と目的を質的に分析した。

4. 調査結果と考察

4-1 調査協力者Aのレポート作成過程

調査協力者Aはレポート作成の最初の97分で472文字の文章を作成した。その際の行動の内訳は表3の通りである。全体の約半分の時間（49分）を「リソース使用」に使い、約3割（28分）を「書く」行動に費やしていた。詳細を見ると、インターネットを頻繁に使用しており、そこから得た情報を

表3 協力者Aが各行動にかけた時間

カテゴリー	秒	%
書く	1665	28.6%
画面を見る	550	9.5%
PCソフト管理	130	2.2%
リソース使用	2915	50.1%
メモ	65	1.1%
リハーサル	5	0.1%
無行動	25	0.4%
休憩	145	2.5%
その他	320	5.5%
	5820	100.0%

レポートを作成している文書内やメモ機能ソフトにコピーアンドペーストし、それを参照しながらレポート本文を書き進めていた。また、最初に別用紙にプランを立てるようなことはせず、直接日本語で本文を書き始めていた。これについてフォローアップインタビューでは「自分は全体のプランを最初に立てておいても一つ崩れると全て崩れてしまうタイプのため、書く内容については頭の中で少しずつプランを組み立て、書きながら少しずつ修正を加えている。これは母語でレポートを書く際にも同じである。」と述べている。また、「韓国語で考えて日本語に直すのは難しいので最初から日本語で考えている。」とも述べている。

次に、多くの時間を費やしていた「書く」行動と「リソース使用」について詳細を分析する。

4-1-1 調査協力者Aの「書く」行動

「書く」行動の中では「ワープロソフトで打つ」行動に最も多くの時間を費やしていた（表4参照）。詳細を見ると、調査協力者Aは思いついた

点から文にして、その前後や間に文を加えながら文章を作成していた。例えば、最初に作成した一文は90分後には文章の一番最後に使用されていた。また、一文を作成する際にも、文の始めからではなくカーソルを前後に動かしながら一文を作り上げていた。

ワープロソフトで日本語を入力する際には、漢字変換の際に変換候補に該当する漢字がないことから、入力しようとしている言葉の読み（入力方法）が正しくないことを認識している様子が見られた。そして、自分で拗音や長音、促音に配慮して正しい読み方を推測して入力し直していた。例えば、「人物描写」を入力する際に最初は「じんぶつびょうし」と入力したが正しく変換されず、拗音に換えて「じんぶつびょうしゃ」と入力し直している。

「ワープロソフトで打つ」以外には「編集する」「レイアウトを設定する」という行動が見られた。「編集」については、形式面の修正に加え、より具体的な内容にする、語順を入れ替えてわかりやすい文にするなどの変更を行っていた。「レイアウト設定」については、文章の文字幅・間隔（文字数・行数）を設定する、本文内にメモしている韓国語部分のフォントの色を変更するなどの行動が見られた。

4-1-2 調査協力者Aの「リソース使用」

表5に各リソースの使用に費やした時間を示した。調査協力者Aはリソースの中でもインターネットの使用に最も多くの時間（25分）を費やしていた。また、テキスト使用にも20分近くの時間を費やしていた。

詳細を観察すると、インターネットは主に以下の3つの目的で使用してい

表4 協力者Aの「書く」行動の内わけ

	秒	%
ワープロソフトで打つ	1335	80.2%
レイアウトを設定	125	7.5%
編集	205	12.3%
	1665	100.0%

表5 協力者Aの「リソース使用」の内わけ

カテゴリー	秒	%
インターネット	1495	51.3%
テキスト	1130	38.8%
電子辞書	125	4.3%
プリント	0	0.0%
ノート	0	0.0%
メモ	50	1.7%
友達	115	3.9%
教師	0	0.0%
	2915	100.0%

た。

- 1) 書くために必要な情報を得る
- 2) 自分の言いたい事を適切に表す表現を得る
- 3) 日本語の適切性を確認する

そして、1) のために検索サイトを、2) のために翻訳サイトを、3) のために検索サイトと翻訳サイトを使用していた。検索サイト使用の際には、必要に応じて検索結果に示された Web サイトも参照していた。

1) のために検索サイトを使用する場合には、検索サイトの使い分けが見られた。内容面で必要な情報を韓国語で検索する際には「NAVER」というサイトを、日本語で検索する際には「Yahoo! JAPAN」「Google」を使用していた。フォローアップインタビューにおいても「「NAVER」は韓国の資料を対象に検索する時、「Yahoo! JAPAN」は日本の資料、「Google」は両方の資料というように、いつも言語により検索サイトの使い分けを行っている。」と述べている。

2) のためには、翻訳サイトを利用して韓国語から日本語に翻訳する様子が見られた。しかし、翻訳サイトで得た日本語訳は採用しないか、または翻訳結果内の表現を取り入れて自分で文を作成する様子が見られ、翻訳結果をそのまま採用することはなかった。フォローアップインタビューでは「今回は翻訳結果をみて聞いたことがない表現であったため、使用しなかった。」と述べている。

3) については、自分で考えた日本語の表現が適切かどうかを確認するために「Yahoo! JAPAN」が用いられていた。しかし、検索結果に確認したい表現が現れず翻訳ソフトを用いたり、そばにいた留学生の友人に聞いたりする等複数のリソースを併用する様子も見られ、これに非常に多くの時間を費やしていた。

二番目に多くの時間を費やした「テキスト」使用については、レポートの課題になっている文章が提示されているページを参照する場合と、課題以外のページを参照する場合があった。前者については、1) 課題として

提示された文章を適切に理解する、2) レポート内容を考える際に必要な情報を得る、3) 課題として提示されている文章内の表現・言葉をレポート内に引用する、という理由でテキストが使用されていた。後者については、4) 課題に答えるために必要な情報を得る、5) 自分の言いたいことを適切に表す表現を探す、という理由でテキストを使用していた。

調査協力者Aは特に1)に非常に長い時間を費やしており、課題となっている文章内に線やメモを書き込んだり、文章内の語を電子辞書で調べたりしながら何度も読み直していた。この点についてフォローアップインタビューでは「課題となっている文章は韓国語では読んだことがあるため内容は知っていたが、日本語で読むのは初めてだったので、わからない言葉を電子辞書で調べながら、また、課題に答えるために必要な情報を書き込みながら読んでいった。」と述べている。そして、「調査終了後にもう一度テキストと書いたものを読み直してみても修正の必要があると考えた。」とも述べている。これらのコメントから、調査協力者Aにとっては課題となっている文章の理解がレポート作成の重要な鍵になっていたことがわかる。

以上に加えて、調査協力者AはPC上の様々な機能を活用する様子が見られた。例えば、インターネットを使用する際には、タブを複製したり、タブの順序を入れ替えたりするなど、情報を見やすいようにタブを有効に利用していた。また、インターネットで得た情報をメモ機能ソフトにコピーアンドペーストしていくことで、デスクトップの一画面の中で文章作成画面とメモの画面が同時に見られるようしていた。

4-2 調査協力者Bのレポート作成過程

調査協力者Aと異なり、調査協力者Bはまず母語で原稿を書き、そこからの翻訳によってレポートを作成していた。フォローアップインタビューでは「授業時の板書のノートやメモをもとに韓国語でレポート構成のプランを立て、それをベースに韓国語で原稿を書き、その原稿を日本語に訳してレポートを作成した」と述べている。韓国語での原稿作成については、「前

期の授業で韓国語で原稿を書いた時に韓国語的な表現ばかりを使ったため日本語に訳す作業が非常に大変だった。それを覚えていて、今回は、後で日本語に訳すことを念頭に置き、日本語に訳しやすい助詞を使うなどして翻訳が速くできるように意識して書いた」と述べている。

表6 協力者Bが各行動にかけた時間

カテゴリー	秒	%
書く	2985	49.4%
画面を見る	840	13.9%
PCソフト管理	175	2.9%
リソース使用	1770	29.3%
メモ	20	0.3%
リハーサル	10	0.2%
無行動	0	0.0%
休憩	40	0.7%
その他	205	3.4%
	6045	100.0%

本調査では、調査協力者Bについては日本語による作業の最初の部分、つまり、事前に韓国語で書いておいた原稿を日本語に訳し始めた部分をデータ分析の対象とした。調査協力者Bはこの日本語に訳し始めた最初の100分の間に1124文字の文章を作成している。行動の内訳は表6の通りで、「書く」ことに全体の約半分の時間（50分）を、「リソース使用」に約3割の時間（30分）を費やしていた。そこで、この2つの行動についてさらに詳細に分析していく。

4-2-1 調査協力者Bの「書く」行動

「書く」行動については調査協力者Aと同様、「ワープロソフトで打つ」行動に最も多くの時間を費やしていた（表7参照）。前述のように、調査協力者Bは韓国語で書いた原稿を日本語に翻訳することでレポートを作成していたが、ただ翻訳をしながら先へ書き進めていくだけではなく、画面のカーソルを何度も上下に動かしながら、既に翻訳した日本語を読み直し、修正を行っている様子が見られた。このように前後しながら文章を作成しているという点は調査協力者Aと共通している。

また、ワープロソフトで漢字を入力する際、変換候補に該当する漢字がないことから、入力しようとしている言葉の読み（入力方法）が正しくないこと

表7 協力者Bの「書く」行動の内わけ

	秒	%
ワープロソフトで打つ	2425	81.2%
レイアウトを設定	215	7.2%
編集	345	11.6%
	2985	100.0%

を認識していたという点も調査協力者Aと同様であった。そして、調査協力者Bも自分で清濁や長音、促音に配慮して正しい読み方を推測して入力し直していた。具体的には、「恰好」を入力する際、「がっこう」と入力したことから「学校」と変換されてしまい、次に「がっこ」と入力するが適切には変換されず、「がっこう」「がっこ」と再び繰り返した後、最終的に濁音を清音に換えて「かっこう」とし適切な漢字変換を得ていた。しかし、このような方法でも適切な変換候補が得られない場合もあり、その際には熟語を個々の漢字に分けて変換する、電子辞書（手書き入力）を使用して読み方を確認するなどの行動が見られた。フォローアップインタビューでも「単語を入力する時、読み仮名の確認のために、例えば長音の確認のために電子辞書を使う。」と述べている。

「編集」については、形式面の修正に加え、同じ言葉の繰り返しを避けるなどの変更を行っていた。「レイアウト設定」については、フォントを変更する、本文内にメモしている韓国語部分のフォントの色を変更するなどの行動が見られた。

4-2-2 調査協力者Bの「リソース使用」

リソース使用については、調査協力者Aがインターネットとテキストを主に使用していたのとは異なり、調査協力者Bは様々なリソースを同程度の時間使用していた（表8参照）。

インターネット使用は、そのほとんどが日本語の適切性を確認するために行われており、特に「不倫を犯す」「経済が生じ」「恋を仕掛けた」等、共起関係の適切性を確認するために検索サイトが使用されていた。フォローアップインタビューでは「辞書に出ているにも実際には使わない表現がたくさんあるので、インターネットで調べ、多くの人が使っている表現を使う方がいい

表8 協力者Bの「リソース使用」の内わけ

カテゴリー	秒	%
インターネット	340	19.2%
テキスト	320	18.1%
電子辞書	315	17.8%
プリント	315	17.8%
ノート	220	12.4%
メモ	0	0%
友達	215	12.1%
教師	45	2.5%
	1770	100.0%

と思った]「長い慣用句や、自分で考えた表現の組み合わせを検索してみて、それが正しい組み合わせなのか、自然なのかを確認する時に使っている」と述べている。また、検索の際に「リアルタイム検索^{注2}」を使う場面が見られたが、これについては、「SNS（「Twitter」や「Facebook」など）はその時の言語使用が即時に反映されるので、検索している表現がリアルタイム検索の結果に現れていれば日本でも使われている表現だと確認できるため使用している」と述べている。

検索のプロセスを詳細に観察すると、最初に「恋を仕掛けた」で検索していたものを「恋を仕掛け」に換えて検索する、「も同じ脈絡」で検索していたものを「おなじ脈絡」「おなじ脈絡で」「同じ脈絡で」に換えるなど、動詞の末尾を消す、表現の抽出範囲を変更する、助詞を変える、漢字をひらがなに変更するなど検索結果が拾えるよう工夫する様子が見られた。

検索結果参照後は、適切性が確認できたためその表現をそのまま使用したり、検索結果内の新たな表現を取り入れて修正する場合も見られたが、調べたいひとまとまりの表現が検索結果では文中で分散して現れたため適切性が確認できない場合もあった。例えば、「恋を仕掛けた」を「Yahoo! JAPAN」で検索した場合には、図1のように「恋を仕掛けた」というフレーズひとまとまりを含んだ文章が検索されるのではなく、「恋」「仕掛けた」という語を含む文章が検索結果として提示された。そのため、「恋を仕掛けた」というひとまとまりの表現の適切性が確認できなかった。そして、その後「Yahoo! JAPAN」のリアルタイム検索や他の検索サイト（「Google」）、電子辞書など様々なリソースを使用し確認に長い時間を費やして



図1 「恋を仕掛けた」のYahoo! JAPAN 検索結果

いたが、最終的にはその表現を使用しなかった。

このような場面で効率的にフレーズの適切性を確認するためには、まず、入力した表現と完全一致の結果がヒットしないということはそのフレーズの共起性が低い、と早い段階で判断すべきであったと言える。また、フレーズの完全一致の結果を確認したい場合は、ひとまとまりの表現の前後に「 ”」（ダブルクォーテーション）をつけフレーズ検索^{注2}を行うべきであった。このような検索サイトの適切な使用方法を理解していれば、何度も検索を繰り返す必要は無く、長い時間を費やすことはなかったのではないだろうか。

「テキスト」使用については、主に「課題として提示されている文章内の表現・言葉をレポート内に引用するため」にテキストを参照していた。韓国語で原稿を書いているため、それを日本語に訳す際に表記方法（漢字・カタカナ）を確認する必要があり、PC画面とテキストを交互に見比べるなどテキスト内の課題となっている文章を読み直す場面が見られた。

調査協力者Bはインターネットやテキストに加えて、電子辞書、プリント、ノート、友達の利用にも比較的長い時間を費やしていた。電子辞書は前述したような入力作業のための漢字の読みの確認に加え、漢字表記や使いたい言葉の意味・用法の確認のために使用していた。プリントは形式面の確認のために日本語の授業で配布された2種類のプリント、連用中止法を含む書き言葉の文体を整理したものと接続詞の用法が整理されたものを使用していた。しかし、連用中止法についてはプリントでは確認しきれず、友達に聞く場面も見られた。フォローアップインタビューでは「日本語の書き言葉に慣れていないのでプリントを参照した。」「『だれだれを見、』などの表現が変だなと思い、友人に正しいか何回も確認した」と述べている。また、接続詞の用法が整理されたプリントを参照したことについては、「韓国語の原稿を日本語にしていく際、文がつながる部分に何を書いたらいいか、韓国語とはニュアンスが違うので悩んだ」と述べている。ノートはレポート課題が出された授業の板書を書き写したもので、内容面での情報を

得たり、表記方法を確認するために活用していた。

5. まとめと今後の課題

本研究では2名の韓国人上級日本語学習者が学部授業で課されたレポート課題を作成する過程の書き始めの部分を詳細に分析した。その結果、2人のレポートを書き上げるスタイルは異なっていたが、両者ともに「書く」と「リソース使用」に多くの時間をかけていた。そして、どちらの調査協力者も入力しようとしている言葉の読みが適切でないことを漢字変換できないことから認識し、自分で拗音や長音、促音に配慮して正しい読み方を推測して入力し直していた。このような漢字の入力の際に発音・表記の誤りに気がつき改善していくプロセスは、石毛（2015b）の台湾人学習者の作文過程を分析した研究とも一致している。加えて、両学習者共に日本語の表現の適切性を検索サイトを利用して頻繁に調べており、日本語ワープロの持つ機能やインターネットを活用していたと言える。

しかし、検索サイトや翻訳サイト等を使って日本語の表現を検索した際には、その結果をそのままの形で使用せず、最終的には調査協力者自身がその適切性を判断し、使用しなかったり修正をして使用したりするケースが多く見られた。これは、自分の語感と対照して適切性を判断できる上級日本語学習者ならではの行動とも考えられる。

本調査で明らかになった問題点としては、検索サイトを効率的に使用できない、もしくは、様々なリソースを使用しても表現の適切性が確認できないために、リソース使用に長い時間を費やす結果となっていた点が上げられる。また、調査協力者Aについては、レポートの課題に適切に答えるために、課題の提示されているテキストや授業のノートを何度も読み直したり、テキスト内の語を電子辞書やインターネットで調べたりしており、この作業にも多くの時間を費やしていた。ここから、学部留学生のレポート作成の書き始めの段階においては、課題に答えるための素材の適切な理解と、日本語の適切性を確認するために様々なリソースを効率的、且つ、

効果的に活用するための力が重要な鍵になるのではないかと考える。

今後はレポートの書き始めだけでなく、様々な部分を観察することによりレポート作成過程の全体像を明らかにしたい。

注

注1 発話思考法 (think-aloud) とは、あるタスクを行なっている際の調査協力者の思考過程を、その時点で自らに表出してもらう方法である。文章産出過程研究の場合には、調査協力者に文章を書きながら、同時に考えていることを発話してもらい、それを分析して調査協力者の思考過程を明らかにしている。

注2 リアルタイム検索とは、Twitter や Facebook などによる書き込みを、リアルタイムに検索結果に反映することのできる検索方法のことである。

注3 フレーズ検索とは、検索ボックスに検索したいフレーズを“ ”で括って入力することで、入力した通りの順序でそのフレーズが含まれているページのみを検索する方法のことである。

付記：本稿は2014年度第4回日本語教育学会研究集会での発表を修正・加筆したもので、科学研究費・基盤研究 (C) (研究代表者:副田恵理子、課題番号: 15K02646)による研究成果の一部である。

参考文献

Pennington, M.C. and So, S. (1993) Comparing writing process and product across two languages: A study of 6 Singaporean university student writers. *Journal of Second Language Writing*, Vol.2, No.1, pp.41-63

Uzawa, K. and Cumming, A. (1989) Writing strategies in Japanese as a foreign language: Lowering or keeping up the standards.

The Canadian Modern Language Review, Vol.46, No.1, pp.178-194

石毛順子 (2012) 『第二言語習得における作文教育の意義と特殊性』 風間書房

石毛順子 (2015a) 「中国語を母語とする上級日本語学習者のパソコンによる作文過程－手書きによる作文過程との比較から－」 『2015年度日本語教育学会春季大会予稿集』 pp.251-252.

石毛順子 (2015b) 「中国語を母語とする中級日本語学習者のパーソナルコンピューターを用いた作文課程で見られる発音と表記方法の変化」 『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』 7、pp.18-24

石橋玲子 (2002) 『第2言語習得における第1言語の関与』 風間書房

衣川隆生 (1993) 「日本語学習者の文章産出方略の分析」 『言葉の科学』 第6号、pp.51-77

副田恵理子 (2000) 「文章産出過程における母語使用の分析－発話思考法を用いて－」 『北海道大学留学生センター紀要』 第4号、pp.81-101

二通信子 (2003) 「専門科目でのレポート課題の実態とレポート作成上の問題点－専門教員及び留学生へのインタビューから－」 『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ 科学研究費補助金基盤研究(A)中間報告書』、pp.89-100

舟橋宏代・大本達也 (2011) 「専門「協賛」科目と連携したレポート作成支援の試み(2)－学部留学生の日本語学習支援として－」 『鈴鹿国際大学紀要Campana』 No.18、pp.75-87

宮崎七湖 (2004) 「留学生の文章産出過程における言語管理」 村岡英裕編『接触場面の言語管理研究vol.3』、pp. 107-132

吉田美登利 (2011) 「意見文産出過程の方略の分析－作文評価が高い学習者と低い学習者の比較－」 『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』 第3号、pp.21-32